

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2693100022		
法人名	株式会社キャビック		
事業所名	ケアホームすいとハンズ向日		
所在地	向日市上植野町下川原4-46		
自己評価作成日	平成24年2月26日	評価結果市町村受理日	平成24年7月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2693100022&SCD=320&PCD=26
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社団法人 京都ボランティア協会
所在地	京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル梅湊町83-1 「ひと・まち交流館京都」 1F
訪問調査日	平成24年3月16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者が住み慣れた地域で、その人らしく、その人の思いを尊重して暮らしていけることを支援します。本社がタクシー会社であることを活かし、大型車両も複数手配出来、全体での外出レクリエーションを愉しんでもらえる。スタッフ全員が2階3階のグループホームを歩き来しており、どの利用者でも対応できる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

向日市の南、旧西国街道沿いにある当事業所は、小畑川の土手が見渡せる静かな佇まいの中、開設4年を迎えている。3階建ての2階3階を2ユニットのグループホーム(以後ホームと称す)にしている。周囲は旧家や新しい住宅が近在し、地域が密着し易い環境にある。ホーム独自の理念を「利用者に寄り添い一緒に生活する」とし、職員は実践の振り返りの基準に理念を置き、日々研鑽している。グループホームはほぼ全員が正規職員であり、シフト勤務ではあるが会議等への参加や、情報の共有化は図りやすい。事業開始に当たっては地域の受入れが厳しい事情もあったが、4年間の職員・利用者の地域に溶け込んだ過ごし方や、事業の取り組みに地域との関係は格段に改善しており管理者はじめ関係者の努力によるものと評価できる。また地域の自然や文化遺産的な環境を活かし、四季折々のドライブやタイムリーな外出の楽しみへの支援は、この法人の特色を活かし、当ホームならではの良さであり、強みである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「利用者の心に寄り添い一緒に生活する」と言う理念を貼り出し、共有するようにしている。	グループホームの独自理念として、2年前に職員にアンケートをとり設けた。定期的なケース会議が理念を振り返り確認し、課題を共有する機会になっている。理念はホーム入口に掲示している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に入り回覧板の地域の情報で行事に参加している。施設のイベントのチラシを配り参加を促している。	地域の町会には入会できずホームと階下の小規模多機能事業所のみで自治会を立ち上げ登録している。地域の行事には案内や誘いがあり、地元の運動会には特別席が設けられ受け入れられている。事業所主催の夏祭りには近所から約60人もの参加者が集まり賑わった。近所の人達から桜や笹など季節の差し入れもあり、開設当初の地域関係とは隔世の感があると管理者は振り返っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	包括主催の地域ケア会議に出席したり認知症サポート養成講座にキャラバンメイトとして参加している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に一度会議を開き、ホーム内利用者状況を伝え地域の役員から意見を貰っている。	家族、市の介護保険課、社協会長、包括支援センター、民生委員がメンバーである。事業報告をし情報を交換している。民生委員から自宅での寄合の場で認知症ケアの話をしてほしいとの要請に管理者は応じている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に市の職員、包括の方の出席あり。	市の担当課は運営推進委員会のメンバーであり、事業運営について相談し、日常的に連携を図っている。包括支援センターから、市民向けに地域密着型事業の話をする機会や講師要請を受け対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	月2回のミーティングで話し合いをしている。	身体拘束については、拘束・虐待担当委員を設け、言葉の拘束を含め話し合っている。ベッドに4点柵を求める家族があり、身体拘束について家族と話し合った例がある。出入口の施錠はしていない。	今後に向け、日々のケアを振り返り、身体拘束手引書などを使い、職員の理解や意識強化への取り組みを期待する。

京都府 グループホーム ケアホームすいーとハンズ向日 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	月2回のミーティングで話し合い、勉強会で意識を共有している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部の勉強会へ参加している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	ホーム長が行い充分な説明と納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	推進会議後家族会を設けスタッフとの意思疎通を図り、意見を反映できるようにしている。	運営推進会議の後に家族会を設けている。内容的には家族の日頃の悩みの吐露などが主であるが、職員異動が多いことや、食事献立・調理について若干の声が挙がっていることについては課題として認識されている。	サービスの提供について、定期的にアンケート等を実施されることも事業所の積極的な姿勢を示す点から意義あることと検討をお薦めしたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月2回のミーティングで職員の意見や提案を反映するようにしている。	全職員で構成される月1回の職員会議、月2回のケースカンファレンス、日々のミーティングが開催され、職員の意見を運営に反映している。職員個々においては半期毎に、自らの仕事の目標や意見等を上申し、法人管理部門と意見を交換する機会が設けられている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	休憩時間・資格試験を取れるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人研修記録やケアについて機会を作り話をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	乙訓グループホーム協会に参加し他施設との交流を図っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	傾聴し、不安が軽減できるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ケアプランを作成する際、必ず家族に要望を聞く。家族来所時に日頃の様子を伝え不安を解消できるよう対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	少しでも不安がある時はスタッフに話しやすいよう声をかけ対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	出来ることや役割を見つけて一緒にするようになっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との情報交換を行い、本人を支えていけるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	生活史から年賀状・暑中見舞いを勧め気軽に面会に来て頂いている。	携帯でかつての職場や、知人と交信している人・手紙やはがきを投函している人・行きつけの喫茶店に月1回訪ねることを習慣にし楽しんでいる人・書道のお弟子さんの来訪のある人と、個人差はあるものの関係の継続に見守り、支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努 めている	其々の認知レベルに応じ関わりがスムーズにいくよう 図っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を 大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォ ローし、相談や支援に努めている	退去後も相談にのったり会いに行ったりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努 めている。困難な場合は、本人本位に検討している	月2回のカンファレンスでスタッフ全員で話し合い、検 討している。	系列の小規模多機能事業所等からの申し込みが多い。 初回は管理者兼計画担当者が家庭訪問をし利用者・家 族から利用動機を聴き取り、家族状況・生活歴、趣味、 特技等詳細に渡る情報を記録し、利用者の希望や理解 に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、こ れまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族や本人から話を聞きスタッフ間で情報を共有し、そ の人らしい生活が出来るよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の 現状の把握に努めている	できる・できないシートを活用し、個別のリズムを大切 にした1日を提供している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方につい て、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの 意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成 している	スタッフの情報交換を密にし、現状把握に努めている。	計画担当者は、職員から利用後の様子や把握した情報・ 職員の意見を集め介護計画(案)を作成している。サービ ス担当者会議には家族の参加を極力求め、担当者等と話 し合い介護計画を策定している。支援記録は介護計画の 課題を踏まえ、実施したケアや利用者の様子が時間に沿 って簡単に記載されている。1日毎に課題への取り組み状 況をチェックし、月1回モニタリングを担当者が行い、3 ヶ月に1回カンファレンスにて評価し見直しの検討をし ている。なお、現在、職員全員が2ユニットを歩き来し 対応されていることについては「馴染みの関係」構築の観 点から付記させていただく。	日々の支援記録は介護計画の課題に留意しつつ、提供 したケアに加え、伴う利用者の応答や表情など具体的な 記載、並びに「気づき」欄の有効活用を望みたい。認知 症ケアは「寄り添う関係」づくりを欠かすことはできな い。利用者の言葉にすざらい思い、日々の行動や表情等 が汲み取れる関係が築けるケア体制であるかの点から 検討を望みたい。

京都府 グループホーム ケアホームすいーとハンズ向日 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケア記録と利用者ノートの活用。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	様々なニーズに柔軟な対応が出来るよう努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域ボランティアの受け入れ。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の往診、急変時も診てもらう。	利用者は、ホームと連携している内科医を主治医としている場合が多い。月2回の往診を受け、往診時はリーダー又は看護師が同席し、情報交換をしている。他科受診並びに認知症専門医の受診は家族が同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回訪問看護あり、利用者変わりあれば24時間電話で相談できる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院関係者との連絡を密にし、事業所の出来る、出来ないことを伝え退院後のケアを検討している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化・終末期の指針を共有すると共に家族会などで話し合いの場を設けている。	法人は「・重度化した場合の指針」を策定し、契約時に説明している。「介護施設の観点から、看取りについての看護、介護はしない」ことが明記され、ADL低下による共同生活困難、医療行為が必要になった場合は家族と相談のうえ、施設や病院利用に関する支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ホーム内での講習会・救急講習に参加。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回避難訓練実施。	避難訓練は夜間想定を含め年2回消防署立会いのもと実施している。地域との連携を企図し、市にはホームの所在地を避難場所に指定してもらっていいと伝えている。訓練実施に及んでは近隣への参加を誘っている。今後更に、地域の人達対象にAEDの講習会を検討しており住民と共に出来る活動を模索している。備蓄は水・食糧・毛布他を確保している。なお、道路幅が狭くはしご車が入らないといった事情がある。	はしご車が侵入できないことについては、2・3階の利用者の避難について、具体的な対応策を消防署と繰り返し確認しておきたい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩としての対応や言葉遣いが出来るよう心がけている。不適切な対応、言葉遣いがある時はその都度注意している。	人格の尊重の観点から利用者の自立支援に着目し、食事・トイレ・入浴など過剰介護になっていないか、自己選択について事例検討をしている。個人情報に係る守秘義務やプライバシーについては居室・トイレの鍵、声かけに注意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	会話の中で思いを知り、希望を表現できる場を作るようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個別の特性に合わせたペースを見極め、そのペースで1日を過ごせる工夫をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	月に1度訪問美容を利用している。毎日着る服も出来るだけ本人に選んでもらう。		

京都府 グループホーム ケアホームすいーとハンズ向日 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事づくりの際何が食べたいか聞き、一緒に作るようにしている。	献立は利用者と相談し決めることもある。調理は仕事にしていた利用者もあり包丁使いも達者で、他の利用者も可能な限り野菜の下準備等に参加している。ランチョンマットや箸置きを使い、職員と共に会話を交わしながら食事をしている。家族の食事内容に関する意見が多少寄せられている。	食事に関する家族の関心は強い。家族とホームの食事を一緒にする機会を設けたり、献立や調理の工夫やエピソードなどの取り組みを「便り」に紹介するのも一案かと考える。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取表をつけている。チェックにより状況を把握し、個々の工夫に繋げている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	声かけをし、本人の力に応じ対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを知り出来るだけ紙パンツは使用せず、布パンツで対応。なるべく自分でやれることは見守り対応している。	排泄パターンを把握し、日中は布パンツで過せるよう支援している。日中6割近く声掛けや誘導によりトイレで排泄出来ている。夜間は熟睡してほしいことや、起こし混乱する人もあり、声かけは控えている。多種類の薬服用により失禁、意識面の混乱が生じ、主治医による薬の調整と、生活面の支援により改善を見た例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事内容を考え、根菜類こんにゃくヨーグルトを提供。身体を動かす。散歩をこころがけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	声をかけ希望に応じ対応している。個々の特性をよく知り、タイミングを見てリラックスできるように対応している。	昼からお湯を入れ、いつでも入浴ができる。寝る前に入りたい人もあり応じている。車椅子利用者2人あり、1人は全介助状態である。回数等の制限はしていないが、隔日に入る人が多い。入浴を敬遠する人はタイミングを見計らい誘導している。	

京都府 グループホーム ケアホームすいーとハンズ向日 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の身体・病状をよく知り、その時々での対応をしている。安心して気持ちよく居られる場所を提供している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の目的・副作用・用法・用量はスタッフ全員が知り対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	調理・散歩・歌等個々に合わせた対応をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に応じたレクリエーションをしている。買い物等の希望があればその都度対応している。	日常的に5～6人でホーム周辺のお地藏さん、馴染みの西国街道、小畑川の土手などに出かけている。車で近隣の神社仏閣や名所に出かける機会が多い。夕刻から嵯峨野の花灯籠を観に行くこともある。利用者に人気ある女剣劇は弁当付きで出かけ外出することによる楽しみを支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的にはホーム管理であるが、自ら自由に使えるお金をもつ方もいる。希望により一緒に買物に行く。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望により自ら電話をかけたり、手紙のやり取りをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節のものなど置き、居心地良くしている。家庭的な雰囲気づくりをしている。	入口近くにソファがあり、一人のんびり横になっている人がある。居間では複数で談笑できる大きなテーブルが置かれている。室内は壁、床、家具の色調がコーディネートされ季節の花が飾られている。窓近くの竹藪や樹木を通して入る光線と、色彩が室内を落ち着かせている。屋内は間接照明で、温度計、加湿器・空気清浄機が置かれ、臭いはない。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	独りになれる空間を作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた物、懐かしい物を使用。居心地良く過ごせるよう工夫している。	居室は洋間でベット・カーテン・空調機以外は利用者の持ち込みとなっている。筆筒、机椅子、鏡台等、馴染みの家具、持ち物が持ち込まれ、趣味の作品や写真が飾られている。居室内は個性があり、ゆっくりくつろげる雰囲気がある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	出来ること、分かることを見極めすぐには手を出さず、側で寄り添いその人らしい生活が送れるようにしている。		